



「作戦の成否を分けた気象現象」

【第6回】「作戦の成否を分けた気象現象」

航空気象群ホームページのコラム「気象の杜」へようこそ。

さて、今回は約80年前の夏に日本から遠く離れた極北で行われた戦いとそこに深くかかわった気象現象について紹介したいと思います。

時は1942年の6月7日から8日にかけて、日本軍はアリューシャン列島の一部、アッツ島とキスカ島に上陸しこれを占領します。ミッドウェー海戦の敗北の裏で行われたこの作戦の目的は、(1)米軍の長距離爆撃機による北海道・千島への空襲の阻止、(2)米空母部隊の本土空襲に対する哨戒線の前進、(3)米ソの連絡線の遮断であり、航空機の活動が困難となる冬季まで確保する予定でした。(2)に関してはミッドウェーでの敗北によりその意味をほぼなくしたものの(1)を重視していたことに加え、翌年に再度攻略することの困難性を鑑みて日本軍は両島の長期確保に方針を変更し、以降は防備を固めようとしています。ここで読者の皆さんの中には、「あのような北の果ての島で越冬することができるのだろうか？」と疑問に思う方もいらっしゃるでしょう。しかしケッペンの気候区分において西岸海洋性気候に属する西部アリューシャン列島は、最も寒い時期でも平均最低気温が -3.2°C であり、東北地方の一部よりも寒さは厳しくありません。しかし、夏季は冷涼であり付近には濃い霧が立ち込めることが多く、冬季の雪とともに航空機などの運用には1年を通して大きな制約があります。

はたして、方針を長期確保に変更した日本軍ですが、同年8月から始まったガダルカナル島の戦いにそのリソースを割かれたこともあり、両島の防備状況は整いませんでした。米軍も日本軍と同様にソロモン諸島の戦いに注力していたものの、もともとの国力の違いから着実にアリューシャン方面にもその戦力を充実させ、付近の島嶼に飛行場を設営し悪天候を縫って空襲を行うとともに潜水艦や水上艦艇による封鎖によって両島の日本軍を追い詰めていき、1943年の5月には遂にアッツ島に上陸、現地の日本軍は玉砕します。

事ここに至って、日本軍はキスカ島に残った5000名以上の将兵を救出・撤退することとします。作戦名は「ケ」号作戦。作戦名の由来は乾坤一擲と言われています。当初は潜水艦による小刻みな撤退が行われた作戦ですが、レーダーを駆使し霧の中でも砲撃を加えてくる米軍の前に損害が重なる状況となります。そこで日本軍は水上艦艇により一挙に将兵を救出しようと試みます。キスカ島周辺を哨戒する米艦艇の目を盗み短時間に遂行することが前提ですが、この作戦の成否はひとえに「霧」の発生にかかっていた。航空部隊による掩護の望めない日本の艦隊にとって、米航空部隊の活動を封じる霧こそがその生命線だったのです。そこで司令官の木村昌福少将は艦隊にレーダーを備えた新鋭駆逐艦島風を加えるとともに気象予報官を増員して作戦に臨みます。

7月7日、艦隊は幌筥を出港しますが、キスカ島周辺の霧に恵まれず「帰ればまた来られるから。」という木村少将の言葉を残し、18日に幌筥に帰還します。これに動揺したのは大本営を含めた上級部隊の面々です。燃料の不足に苦しむ日本には同作戦を実施する余裕はあと1回しかなく、キスカ島周辺の霧も7月を過ぎると最盛期を過ぎるため早ければ8月には米軍による上陸作戦が行わ

れるとの推測があったからです。こうした上級部隊の焦りに反し、木村少将は泰然自若と構えていたそうです。7月22日、幌筈の气象台の「25日以降、キスカ島周辺に確実に霧が発生する。」との予報を受け再度艦隊は出撃します。今回は出航直後から艦隊が霧に包まれたことにより途中で数隻が衝突事故を起こすトラブルがあったものの攻撃を受けることはなく推移、7月29日をキスカ島突入の日とします。突入前日の28日には艦隊周辺の霧が一時的に晴れたことで天測により正確な艦位が測定できましたが、それと同時に「このまま霧が晴れるのでは？」という不安が艦隊を包みました。しかし今回は各種気象予報を信じ予定通りに突入することとします。その日の夜、キスカ島に接近するにつれて予報通りに濃さを次第に増す霧を見て気象業務に従事していた石原中佐は参謀長と抱き合っただけ喜んでことを回想しています。

7月29日、予定通りキスカ島に到着、予報のとおり周辺は霧が発生しており視界は概ね1500m、海面から50mの高さにべったりと雲が広がっているというまさに理想的な状況でした。直ちに湾内に突入した艦隊は迅速に収容作業を済ませてすぐさま出航し8月1日には収容した5183名の将兵とともに全艦艇が幌筈に帰還、ここに戦史上稀にみる完全な成功を収めた、乾坤一擲の作戦は終了します。

今回紹介した「ケ」号作戦は戦史上最も気象現象が結果を左右したものの一つです。それは日本の艦隊を隠した霧の発生もさることながら、他にも奇跡的な幸運が重なっていました。日本艦隊がキスカ島に突入する2日前に米軍はキスカ島西方約90マイルにおいて日本艦隊と思われるレーダー反応を検知、直ちに戦闘を開始し約40分間の戦闘で各種砲弾1972発を発射、その後目標が急速に遠ざかり失探したことで戦闘は終了します。この戦闘の原因となった謎の目標を米軍では「非日常的な気象状況により、約200km遠方にあった島々の電波反応を捉えたもの。」と推測しています。弾薬の不足した米艦隊は弾薬補給のために一旦後方に下がりキスカ島周辺の警戒を解きます。日本軍が撤退した翌日の7月30日からは弾薬を補充した米艦隊が再びキスカ島を包囲、半月後の8月15日に大規模な上陸作戦を敢行し、霧の中での同士討ちにより死者を含む損害を受けています。これほど気象現象が一方にだけ幸運をもたらした戦いも珍しいでしょう。こうした幸運をつかむことができた大きな要因としては、木村少将をはじめとする各指揮官の判断力とそれを支えた気象予報にあったことは明白です。

現代においても霧は航空機や艦艇の活動を大きく制限します。またレーダー技術は当時から大きく発展したものの、特定の気象条件下においては存在しないものを探知してしまうエンジェルエコーという現象は変わらず発生します。こうした軍事活動を阻害する現象の発生や強度を正確に予報し克服・利用することは現代においても変わらない重要性を持っているのです。

【参考文献】

- 1 戦史叢書 「北東方面海軍作戦」 (朝雲新聞社)
- 2 OFFICE OF NAVAL INTELLIGENCE - UNITED STATES NAVY “The Aleutians Campaigns: June 1942 - August 1943” (Office Of Naval Intelligence)